

# 「謎」<sup>マイ</sup>

石 山 興 武

## 要 項

はじめのことば

1、支那における謎の發展

第一次段階 「隱語」及びその範疇に屬するもの、

二〃 謎の發生

三〃 「謎 字」

四〃 「字謎」及び「普通の謎」

五〃 文學としての謎、「謎詩」、「離合詩」、「謎字詩」

六〃 風俗としての「灯謎」

七〃 一般に謎の意味での「灯謎」

2、日本における影響

むすびのことば。

はじめのことば

「謎」とは、日本でいふ「ナゾ」とその範疇を全く一にしてゐるものではない。日本でいふ「ナゾ」は専ら遊戲であり、

そこには何の隠喩も見出せない。「謎」の中の一部にはかうしたものも含まれるのであるが、決してそればかりではないのであつて、支那の「謎」は歴史的にも又、方面的にも、多くの内容と、多くの名稱をもつた廣範圍に亘るものである。而して、その本來の意義に遡つて考へてみれば分るやうに、「謎」は決して卑しむべきものでも、低級視さるべきものでもないであつて、むしろ、積極的にこれが解明に、又これが體系づけに努力すべきではないかと思はれる。

私は小論において、「謎」の範疇とその發展經過について述べ、何が故に私が「謎」を漢學の問題として取り上げたかについて一言したいと思ふ。

なほ日本で「ナゾ」といふものが支那の「謎」とは異なるといつたが、それは名稱上のことであつて、その内容からいへば、支那の「謎」は早くから日本に輸入されて大きな影響を残してゐるので、最後にそれについて述べたい。

# Ⅰ 支那における「謎」の發展。

## 第一次段階「隱語及びその範疇に屬するもの」。

左傳の宣公十二年冬の條をみると、

(一) 楚子討蕭。宋華椒以蔡人救蕭。蕭人囚熊相宜僚及公子丙。王曰勿殺。吾退。蕭人救之。王怒。遂圍蕭。蕭潰。申公巫臣曰師人多寒。王巡三軍拊而勉之。三軍之士皆挾紼。遂傳於蕭城。還無社與司馬卯。言號申椒展。叔展曰有麥麴乎。曰無。有山鞠窮乎。曰無。河魚腹疾奈何乎。曰目於智井而拯之。若爲茅經哭井則已。明日蕭潰。申叔視其井則茅經存焉。號而出之。

とあつて、杜預の注によれば、

(二) 麥麴。麴窮所以禦濕。欲使無社逃泥水中、無社不解。故曰無。軍中不敢正言。故諺語。として、諺語として説明し、又河魚腹疾については、左傳續考によれば、

(三) 疏云叔展乃曰必須入井、故以水厄告之云、如似河中之魚久在水内則生腹疾。無此二物夫奈濕何。

とあり、こゝは「古井戸にかくれて逃れよ。」といふ「ナゾ」である。（この意味での「ナゾ」は日本語でも用ひる。）

同じく左傳哀公十三年には吳の申叔儀が魯の大夫公孫有山氏に兵糧を乞ふた所が、魯大夫の答に曰く、

（4）梁則無矣。麇則有之。若登首山以呼曰庚癸乎則諾。

とあり、杜預、之を解して曰く、

（5）軍中不得出糧。故爲私隱也。庚西方。主穀。癸北方。主水也。……………

清の趙翼、著す所の陔餘叢考においてはこの二例を以つて「謎」の濫觴として居る。即ち、

（6）謎即古人之隱語。左傳云申叔展所云山鞠窮河魚腹疾。公孫有山之呼庚癸。其濫觴也。（謎）

かくの如く、「謎」が古の隱語謬語等と同一であることを云つてゐるものに劉勰の文心雕龍がある。

（7）讒者隱也。遯辭以隱意。譎意以指事也。……………漢世隱書十有八篇。歆固編文錄之歌末。……………自魏代已來頗非俳

優而君子嘲隱。化爲謎語。（諸讒第十五）（漢書藝文志の雜賦にも隱書十八篇とある。）

宋の周密の撰になる齊東野語には、

（8）古之所謂瘦詞。即今之隱語而俗所謂謎。玉篇謎字釋云隱也。

或は國語晉語五には、

（9）范文子莫退於朝。武子曰何莫也。對曰有秦客瘦辭於朝。大夫莫之能對也。吾知三焉……………

列子說符篇には、

（10）白公問孔子曰。人可與微言乎。

韓詩外傳には、

（11）客善以不言之說。周公善聽不言之說。若周公可謂能聽微言矣。

劉向の列女傳仁智傳、魯臧孫母の章に、

(12) 文仲微使人遺公書。恐得其書。乃謬其辭曰。斂小器投諸臺食獵犬組羊裘琴之合思之。……………  
說苑正諫篇には、

(13) 晉平公子樂。……………有咎犯者、見門大夫曰、臣聞主君好樂、故以樂見、……………平公曰客子爲樂。咎犯對曰、臣不能爲樂。臣善隱。平公召隱士十二人。……………平公曰善、乃屏鐘鼓、除竿瑟、遂與咎犯參治國。

以上を綜括して、古の隱語・謬語・瘦詞・瘦辭・微言・謬辭等はすべて、後の「謎」であることが類推出來よう。  
次に、かゝるものが何時頃から、どんな形式で行はれたか。左傳所載のものが濫觴であるにしても、左傳そのものが製作年代不明なので決定は出來ないが、少くとも漢代以前に行はれたものであることは確かであり、或は古來の童謡もすべて隱語であるともみられるが、一應漢代以前としておく。但し、名稱は後のものであるかもしれない。即ち左傳では自からは隱語とも謎とも稱してゐない。自から謎と稱してゐるのは、呂氏春秋である。

(14) 荊莊王立。三年不聽。而好讒。(高誘注 聽謬言)成公賈入諫。工曰不穀禁諫者。今子諫何故。對曰臣非敢諫也。願與君王爲讒。王曰胡不設不穀矣。對曰有鳥止於南方之阜。三年不動。不飛。不鳴。是何鳥也。王射之曰、有鳥止於南方之阜。其三年不動將以定志意也。其不飛將以長羽翼也。其不鳴將以駭人。賈出矣。(審應覽 重言篇)

これによれば題を出すことを「設」といひ、それをあててゐることを「射」といつたものらしい。これと同じ記事は史記にもあり、次のやうになつてゐる。

(15) 莊王即位。三年不出號令。……………伍舉入諫。……………伍舉曰願有進隱。曰有鳥在於阜。三年不蜚不鳴。是何鳥也。  
莊王曰三年不蜚。蜚將冲天。三年不鳴。鳴將驚人。(楚世家)

又漢書の滑稽列傳にも次のやうな記事があるから、この謎は漢代における一般的な隱喩であつたともみられよう。

(16) 淳于髡者齊之贅婿也。……………齊威王之時喜隱好爲淫樂長夜之飲。……………左右莫敢諫。淳于髡以隱曰國中有大鳥、止王之庭。三年不蜚。又不鳴。王知此鳥何也。王曰此鳥不飛則已。一飛冲天。不鳴則已。一鳴驚人。

又齊東野語には

(17) 人皆知其(筆者注謎語也) 始於黃絹幼婦而不知自漢伍舉曼倩時已有之矣。<sup>※1</sup>  
とあつて、やはり、「謎」の起原は漢代以前に在ることを云つてゐる。<sup>※2</sup>

※1第三次段階(六九頁)、(30)参照

※2東方朔のことである。(18)参照

漢書東方朔傳を見ると、朔、名は曼倩とあり、或事に坐して舍人が折檻され「不勝痛呼暴言。」した。その時、朔が之を笑つて、「咄口無毛、聲贅々。尻益高。」と云つた。舍人が擅に朝臣をそしるとなしてなじつた時、朔はこれは隱語であるといつて、次のやうに辯解したとある。

(18) 朔曰夫口無毛者狗竇也。聲贅々者烏哺嚙也。尻益高者鶴俛啄也。

これを齊東野語では云つたものであらう。伍舉のことは前に述べた。(周密は左傳所載のものは知らなかつたのであらうか。)

### 第二次段階「謎」の發生

以上のものが「謎」と稱されるやうになつたのは魏の代からのやうである。先づ文心雕龍によれば、

(19) 謎也者廻互其辭使昏迷也。或體目文字。或圖象品物。纖巧以弄思淺察以銜辭。義欲婉而正。辭欲隱而顯。(諧謔第十五)

第十五)

又、その用途については、

(20) 隱語之用被於紀傳。大者興治濟身。

が本質的であつたものが、後世に至ると「謎」となつて

(21) 雖有小巧用、乖離大。夫觀古之爲隱。理周要務。豈爲童稚之戲謔、搏髀而析笑哉。……

といはれるに至つたものらしい。即ち、初は遊戲を對象として行はれたものではなく、譎諷諷諫を目的とし、以つて、治國平天下の具たらしめんとする所にその本質が在つたものが後代に至つては、低級な謎一般となつてしまつたものと見ることが出来る。

さて、この謎は何時頃から行はれたか。魏書には

(22) 世宗既覽政。禧意不安。……禧憂迫不知所爲。謂龍虎(注曰禧之從者也)曰、憤々不能、試作一謎。當思解之以釋毒悶。龍虎歎憶舊謎云眠則俱眠、起則俱起、貧如豺狼。藏不入己。都不有小於規刺也。禧亦不以爲諱已。因解之曰此是眼也。而龍虎謂之是箸也云云(咸陽王禧傳)

とあり、この中に舊謎とあるから、これより以前にもあつたらしいが、文獻に残るものはこれが最古のやうである。さればこそ文心雕龍(7)では謎と稱するは魏代より初まるといふのであつて、鄭餘叢考では趙翼がやはり、「其名曰謎則自曹魏始」といつてゐる。これより以前には謎とは稱さなかつたといふ意らしい。なほこの謎は後の普通の謎と同一形である。

### 第三次段階「析字」

隱語から謎に至る系統と全然別個に、こゝに析字と呼ばれる系統が存在する。これは文字の解釋をする上に、支那文字獨特の性質より、かゝる方法が考案されたものらしい。析字とは一文字の形體を分析して、二つ以上とし、各

部分の意義を以つて綜合的に、意義を決定せんとするものであつて、後漢の許慎の説文解字はその尤なるものといふべく、一方には、識緯思想の發展による解字法も盛行し、これらの合したものが、析字となつたもののやうである。

癸巳類稿卷六には、「緯字論」なる一章があり、漢代における、緯書にあらはれた解字法を輯録してあるが、文字の上からは、荒唐無稽なものも多く、當らないものは、勿論多いのであるが、かゝる風の生じたる所に面白いものがあると思ふ。この緯字論には四十の解字(中十五は漢以後のものもある。)を載せて居る。

(23) 兩人交一從中出者爲水。

四合共一者爲日。

兩口御士爲喜。

二人爲仁。

十加一爲士。

刀嘗爲罰。

廷尉立字士垂一人詰屈折箸爲廷

荆字從刀從井

天合爲大一。

西米爲粟。

虫動於風中者爲風

二在天下爲酉。

黃爲千里草。

(秦)以田斗爲卑。

恭爲黃頭小人。

(齊)以桑爲四十而有二點。

以候景爲小人百日候景。

(周)以宣政爲字文亡日

(唐)以元吉合成

土力於乙者爲地。

日者口合共一。

屈中挾乙而起者爲史。

八推十爲木。

罔言爲罾。

人散二者爲火。

示戴尸首以寸者爲尉

星目下生也。

劉 卯金刀。

禾入水爲黍。

人十四心爲德。

(漢)以泉爲白水。

(魏)以角爲刀下用。

(晉)以享爲二月了。

(宋)以劉有兩口。

(梁)以填爲一十一月一八

以候爲天一八

(隋)以業爲苦來

李爲十八子。

(遼)以永爲潢土二水。

左傳に

(24) 止戈爲武。皿蟲爲蠱。

とあり、又漢書王莽傳には

(25) 劉之爲字、劉金刀也。(說文・緯字論にもある)

說文敘文には、

(26) 馬頭人爲長。人持十爲斗。虫者屈中也。

とあるのが柝字のもとではないかと思ふが、明の鼎思容の琅玕代醉編では、

(27) 潘黨(春秋の楚の時代の人)曰、君蓋築武軍而收晋尸以爲京觀、臣聞克敵必視子孫、以無忘武功、楚子曰非爾所知也、夫文止戈爲武、伯宗曰天反時爲災。地反物爲妖。民反德爲亂。亂則灾妖生。故文反王爲乏。此後世柝字之始。といつて居る。然し、これは何によつたものか不明であるから、當てにならない。

又、筆者の父の輯録したものには次の如きものがある。

(28) 伍 五 人 (周禮)	蒿 高 草 (晏子)	聞 門 耳 (定命錄)
鈎 金 勾 (揮塵錄)	卒 九 十 (野人閑話)	銀 金 良 (真人新論)
泉 白 水 (漢書)	鮮 魚 羊 (晉書)	劭 召 力 (宋書)
蕭 草 肅 (南齊書)	運 軍 走 (隋書)	嵬 山 鬼 (唐書)
申 口 十 (稽神錄)	肉 内 人 (柳煌錄)	許 言 午 (三國志註)
孚 爪 子 (群居解頤)	億 人 意 (桐陰舊話)	槐 木 鬼 (酉陽雜俎)
寺 寸 土 (桂苑叢談)	惠 直 心 (古今印史)	正 一 止 (避暑漫抄)



地土也	(蓼花洲雜錄)	星日	生	(春秋說題詞)	苦草	古	(四朝聞見錄)
盛成皿	(萬柳溪邊舊話)	貧分	貝	(讀書偶見)	全人	王	(江行雜錄)
忠中心	(江行雜錄)	珠朱	王	(誠齋雜錄)	鞋革	圭	(全上)
舍人一口	(魏書)	貞與上人	(梁書)		幽絲	桂山	(北齊書)
松十八公	(張勃語錄)	劉卯金刀	(鄭樵通志)		吉十一口	(鍾輅前定錄)	
蘭門東草	(中僧儒怪錄)	春一日夫	(謝小娥傳)		杏十八日	(大業拾遺記)	
人天無二	(元散詩話)	董千里草	(王粲英雄記)		卓十日卜	(全上)	
恭黃頭小人	(晉書)	吳天上有口	(三國志)		圖四口一十	(錢氏私志)	
畢四十一口	(澤山雜記)	西二在天下	(中培詩說)		黃田八廿一	(悅生隨抄)	
朝十月十日	(鐵圍山叢談)	水兩人交一	(春秋元命苞)				

これらは緯字論のものよりも一步進んでゐるものと見ることが出来る。

明の田汝成の委巷叢談には輟耕錄を引用して、

(29) 杭人有以二字反切一字以成聲者。如以秀爲鯽溜。以團爲突變。以精爲鯽令。以脩爲鯽跳。以孔爲窟籠。以盤爲勃蘭。以鐸爲突落。以窠爲窟陀。以囹爲窟變。以蒲爲體虛。有以雙聲而包一字易爲隱語。以欺人者如以好爲規薩。以醜爲懷王。以罵爲雜嗽。以笑爲喜黎。以肉爲直綠。以魚爲河戲。以茶爲油老。以酒爲海老。以沒有爲埋夢。以莫言爲稀調。又有諱本語而巧爲俗語者。如詬人嘲我曰溜牙有謀未成曰掃興。冷淡曰秋意無言默坐曰出神。言涉敗興曰殺風景。言胡說曰扯淡。或轉曰牽冷則出自守時。梨園市語之遺未之改也。

といつてゐるのも、析字の思想と相似てゐる。而も隱語と云つてゐる所よりみるも、これらは析字と同一思想によつて起つたものたることは確である。

前述の「黃絹幼婦」に就いては、世説に、<sup>17)</sup>

(30) 魏武嘗過曹娥碑下。楊脩從。碑背上。見題作黃絹幼婦外孫齏臼八字。魏武謂脩曰解否。脩答曰解。魏武曰卿未可言。待我思之。行三十里。魏武乃曰吾已得。令脩別記所知。脩曰、黃絹色絲也。於字爲絕。幼婦少女也。於字爲妙。外孫女子也。於字爲好。齏臼受辛也。於字爲辭。所謂絕妙好辭也。……(說文段注によれば齏と辭とは異字であるが漢の蔡邕といつてゐる。なほこの謎の作者は東)

とあるが、これは析字を更に複雑な謎語化したものである。

要之、漢代は文字に對する興味の高まつた時代であるから、かくの如き、分析的な解字法も發達し、ひいて謎語化したものであらう。

#### 第四次段階、「字謎」及び「普通の謎」

(30)の如くなる一步手前に存するのが字謎であり、或は普通の謎である。(八〇頁表參照)

齊東野語に輯録されたものは、殆んどこれである。詩形を完全になすものは除外して、その他のものをあげれば、(括弧内はその答である)

(31) 一、一月復一月。兩月半邊。上有可耕之田、下有長流之川。六口共一室。兩口不團圓。(用の字)

ロ、重山復重山。重山向下懸。明月復明月。明月兩相連。(同前)

ハ、晝時圓、寫時方、寒時短、熱時長。(日の字)

ニ、東海有一魚。無頭亦無尾。除去脊梁骨。(日の字)

ホ、寒則重重疊疊。熱則四散分流。四箇在縣、三箇在州。村裏不見、在村裏市頭不見在市頭。(字點)

以上は字謎である。

ヘ、我本無名。因汝有名。汝有不平、吾與汝平。(木玷)

ト、身居色界中不染色界塵一朝解塵縛見姓自分明。(染物霞頭)

チ、彼亦不敢先。此亦不敢先。惟其不敢先。是以無所爭。是以能入於不死不生。(持棊)

リ、方圓大小隨人腹裏文章儒雅有時滿面紅妝常在風前月下。(印章)

ヌ、上不在天。下不在田。中心藏之。玄之又玄。(蜘蛛)

ル、自東自西。自南自北。無思不服。(同前)

ヲ、可以託六尺之孤。可以寄百里之命。遇剛則斲爾有聲。遇柔則鹵沒無怨。(木屐)

ワ、瞻之在前。忽焉在後。樂然後笑。人不厭其笑。(蹴鞠)

カ、大底不曾說小底。小底常是說大底。若要知得大底事須去仔細問小底。(夾註書)(以下略)

これらは、普通の謎である。經書の一句を斷章取義したりしてゐる所は面白いと思ふ。

字謎も、普通の謎も、段々その形を整へて來て、こゝに詩形をとるやうになると次の段階に入るのである。

#### 第五次段階、「文學」としての「謎」

##### 謎詩・離合詩・拆字詩

北宋の鮑照の詩集第七に謎詩三首がある。

(32) イ、二形一體。四支八頭。四八一八。<sup>イ、一八五八</sup>飛泉仰流。(井の字)

ロ、頭如刀。尾如鉤。中央橫廣。四角六抽。右面負兩刀。左面雙屬牛。(龜の字)

ハ、乾之一九。隻立無偶。坤之二六。宛然雙宿。(上の字)

この詩が謎詩の嚆矢とされてゐるが、桂苑叢談には、

(33) 一人堂々。二曜同光。泉深尺一(寸)。「點去氷傍」。二人相連。不欠一邊。三梁四柱。烈火而然。<sup>イ拱</sup>(無)除却隻勾。

兩目「不全」。

といふがある。(琅玕代醉編所引のものは「」内はなく「」内がある。これだと完全な詩形になるから桂苑叢談のは引用の誤であらうか。)これは四字二句で一字を表はし、大明時イキ  
〔水〕天下無比を意味するといふ。これなどは宋だ隠語の意味が認められると思ふ。

又、陔餘叢考には

(34) 王介甫柄國時。有人題相國寺壁云。終歲荒蕪湖浦焦。貧女戴笠落柘條。阿儂去家京洛遙。驚心寇盜來攻剽。東披解之曰終歲十二月也。十二月爲青字。荒蕪田有草也。草田爲苗字。湖浦焦水去也。水去爲法字。女戴笠爲安字。柘落木剩石字。阿儂是吳言。吳言爲誤字。去家京洛爲國。寇盜爲賊民。蓋言青苗法安石誤國賊民也。……  
といふのがあり、更に古い所では、沈德潛の古詩源張王穀の古詩賞析等に載せられた漢詩の中に、

(35) 藥枯今何在。山上。復有山何當大刀頭。破鏡飛上天。  
といふのがあり、古詩賞析の解によれば、

(36) 藥枯硤也。山上有山出也。大刀頭刀上有鏤也。破鏡半月當還也。按藥枯今之打柴石。古人名硤。借指夫也。刀上有鏤。借作還歸之義。

とあつて、かくの如くに詩の一句が字一字或は一概念をあらはすものは、離合詩の起原をなすものである。  
離合詩とは、偏旁を離してそれを合して一字とする詩の謂である。

(一) 一字の偏旁を離して兩句とし、四句湊合して一字となすもの。例へば、南宋の謝惠連の詩に、

(37) 放棹遵遙塗。方與情人別。〔放〕方〔文〕  
嘯歌亦何言。肅爾凌霜節。〔嘯〕肅〔口〕  
又十口各

(38) 夫人皆薄離。二友獨懷古。〔夫〕二〔人〕  
思篤子衿持。山川何足苦。〔思〕山〔忒〕  
人十忒念

これが複雑になると、漢の孔融の詩に次のやうなのがある。

(39) 漁夫屈節。水潛匿方。與時進止。出行施張。

呂公釣磯。益口涓傍。九域有聖。無土不王。

好是正直。女包于匡。海內有截。隼逝鷹揚。

六翮將奮。羽儀未彰。蛇龍之慕。俾也可志。

玫璚隱曜。美玉韜光。

無名無譽。放言深藏。按轡安行。誰謂路長。

魯 國 孔 融 文 舉

少し混雜してゐる。晋の潘岳の次の詩は完全である。

(40) 仙漁始化。人民穴處。意守醇樸。音應律呂。

桑梓被源。卉木在野。錫鸞未設。金石拂舉。

害咎蠲消。吉德流普。谿谷可安。奚作棟宇。

嫺然以意。焉懼外侮。熙神委命。已求多祐。

嘆彼季末。口出擇語。誰能默識。言喪厥所。

聖畝久之諺。龍潛巖阻。尠義崇亂。少長失敬。

思 楊 容 姬 難 堪

の如きものは宋代に多い。

(二) 一字の偏旁を離して二句とし、六句湊合して一字となすもの。例へば惠連の族兄、謝靈運の詩に、

(41) 古人怨言次。十日眇未央。

加我懷縫綫。口脉情亦傷。

劇哉歸遊客。處子勿相忘。

口 力 別

の如きものがそれである。

(三)一字の偏旁を一句の首尾に離して首尾相續きて一字となすもの。

松 間 料

(42) 子山園靜憐幽木。公幹詞清詠蕭門。月上風微瀟洒甚。斗謬何惜置盈樽。  
から「松間料」を出だす如きものをいふ。この外にも未だ種々の形のものもあるが(一)の形のものが最も多く、その他のものは稀であるから、今省略する。

析字詩といふのは一句の中に析字を含むもので、例へば、陔餘叢考に次の詩を載せてゐるが、或はこの析字詩の形が、離合詩の原形かもしれない。(一句の第一・二字合して、第三字となる)。

(43) 日月明朝昏。山嵐風自起。石皮破仍堅。古木枯不死。可人何嘗來。意若重千里。永言詠黃鶴。志士心未已。

次には普通の謎の詩に就いて述べるならば、やゝ後のものであるが、清の毛際可の檀几叢書の中に※「燈謎」の一章があり、次のやうな詩を十二首載せてゐる。(※これは第六次段階で述べる)

(44) イ、美玉無瑕輯瑞同。岐豐佳氣慶雲中。從天產下鱗蟲長。兩道祥光一色紅。

聖瑞圖。

ロ、虎旅歸來已罷兵。關梁無禁任遙征。九重天子稱仁聖。異獸趨朝負輦行。

太平樂。

これは實は一句に一名づゝ孟子篇中の人物の名を詠みこんであるもので、(イ)の詩は首句より、白圭・周霄・龍子・丹朱であり、(ロ)は畢戰・許行・王良・象を意味するものである。

右の如く、謎詩は六朝より宋にかけて起つたもののやうに思はれる。

#### 第六次段階 風俗としての燈謎。

陔餘叢考では觸れてゐないが、こゝに北宋の時、(或は明初ともいふ)から元夕(陰曆正月十五日夕)に軒に燈を提げその面に謎を書き譯し、人にあてさせる風習が始まつた。之を燈謎といふ。

委巷叢談によれば、

(45) 杭人多以此爲猜燈。

(46) 輟耕錄言杭人好爲隱語以欺外方。云云、

とあるから、灯謎は杭州より初まつたやうに思はれる。又周密の武林舊事によると、元夕に用ふる燈はすばらしいもので、琉璃で作つたり、絹張り、或は無骨とか高さ五丈もあるものとか、云つてゐる。而してその「燈品」の條に、

(47) ……又有以絹燈、剪寫詩詞、時寓譏笑及畫人物藏頭隱語及舊京諠語戲……。

とあり、(29)でも述べたやうに杭州人はかゝることに興味をもつて居つたもののやうである。

この風は今でも一般に行はれて居るといふことである。(44)で述べたものはこれに用ふるものであらう。

「紅樓夢」の第二十二回に賈元妃が宮中から灯謎を送つて、

(48) 能使妖魔膽盡摧。身如束帛氣如雷。一聲震得八方恐。回首相看已化灰。

とあり、これを「爆竹」と解したとある。

又同じく第五十一回には、「懷古詩」とて、

(49) 寂寞脂痕積汗光。溫柔一旦付東洋。只因遺得風流迹。

とあるが、これは「胰皂」のことであると鈴木虎雄博士はいつて居る。(支那文學研究)

この灯謎の作法は二十四格あつたが、今は捲簾・蝦蟇・會意・柝字・解鈴・繫鈴が残すのみといふ。(辭源説)

王古魯先生によれば、捲簾格とは、例へば、

文 巧 印

(50) 十二・十八・兩日電報。(鏡花緣人名捲)(電報の公文のものには印と記す、十二、十八は日付の場合文韻巧韻を以つて之に當てる。)

の如きもので、これは下より逆に「印巧文」を表はすものだといふ。その他の格は目下の所未詳である。

#### 第七次段階 一般に謎の意味での「灯謎」。

現在では、一般に謎のことを灯謎とか文虎・灯虎・灯糊・商燈とか云ふ。虎と糊とは普通であり、糊とは「あいまいにする」意で謎と同一義ではないかと思はれる。

さて、近來では如何なる灯謎が行はれて居るかといふに、やはり、先に述べた格をもつたものもあるが、大部分は次の如くに簡易になつてゐるやうである。即ち、支那語學報第六號の七三頁に永持徳一氏の擧げて居る例には次のやうなのがある。

(51) 三人一日打一字

底春。

竹上即頭打一字

底節。

「打」とは「解け」といふ意味。即ち「三人一日」を一字で解けといふのであつて、これを「面」と稱し、答を「底」と稱するといふ。或は次のやうな形のものもある。

(52) 虫入鳳中飛去鳥。

底風。

草木之中有一人。

底茶。

藥字頭上無草。

底樂。

民國十三年八月から上海中華書局で「注音字母」の宣傳書として兒童文學叢書を發行した。この中に十二冊からなる「謎語」といふのがあり約四四〇の謎を蒐集して居り、この謎に注音字母が付してある。この謎は所謂「ナゾ」であつて、たとへば、

(53) 看不出、摸得出、等到摸不出、大家眼淚出。

といふのは「診脉」であり、

(54) 一棵樹、高又高、不怕雷打不怕火燒。只怕風來吹斷腰。

は「煙」である。



桥字の謎には、

(55) 手外有三口、木字在下頭。

といつて「操」の字があり、又次のやうな複雑なものもある。

(56) 半面有毛半面光。

半面美味半面香。

半面放在山坡地。

半面常在水中藏。

といふのは「鮮」の字である、これはその解に、

(57) 鮮字可以分爲一個「魚」字和一個「羊」字。羊全身有毛、魚沒有。羊肉和魚的味道都很好。羊時在山上吃草。魚只能在水中游來游去。といつてゐる。

(58) 茶几縫中藏一蟲、

七人頭上草叢々。

大雨落在横山上。

良朋一月不相逢。

は「風花雪月」を意味する。

## II 日本における影響

次に日本における影響をみるに、先づ最初には内容そのものの輸入、ついでは型式の日本化が行はれた。即ち、

### A 内容の輸入

萬葉集卷九、相聞歌に天平元年己巳冬十二月歌一首並短歌とて、

(59) うつせみの、よのひとなれば、おほきみの、みことかしこみ、しきしまの、やまとのくにの、いそのかみ、ふるさとにひもとかず、まろねをすれば、わがきたる、ころもはなれぬ、みるごとに、こひはまされど色イロニ二山イデ上復有山者、ひとしりぬべみ、ふゆのよの、あかしもえぬを、いもねずに、われはぞこふる、いもが、たよかに。

とあり、萬葉集略解によれば、

(60) 山上復有山、五字出の意にていと訓。古樂府の山上更有山、又詩に山上有山不得歸。これらをおもへる書ざま也。

とあるが、これは、古詩源所載のかの詩(35)の第二句と一字も違はない。又、義訓として諸書にあげられる

二二シ、十六シシ、重二シ

と訓する點は(32)の四八一八に類する。唯それに日本的の訓を施したにすぎないと思ふ。

これらは字謎の輸入であるが、本朝文粹に至ると、析字詩・離合詩の輸入が行はれて居る。

字訓ノ詩

清原眞友

(61) 禾失會知<sub>レ</sub>秩。中心豈忘<sub>レ</sub>忠。

里魚穿<sub>レ</sub>浪鯉。

江鳥度<sub>レ</sub>秋鴻。

火盡仍爲<sub>レ</sub>燼。

山高自作<sub>レ</sub>嵩。

色絲辭不<sub>レ</sub>絕。

凡蟲泣<sub>レ</sub>寒風。

字訓ノ詩

源順

(62) 周禾致<sub>レ</sub>瑞稠。

人壽與<sub>レ</sub>仙儔。

加<sub>レ</sub>馬馳<sub>レ</sub>高駕。

求<sub>レ</sub>衣擁<sub>レ</sub>善裘。

夏香蓮綻<sub>レ</sub>穠。

秋木葉落<sub>レ</sub>楸。

官舍飽<sub>レ</sub>門館。

三刀幾<sub>レ</sub>九州。

離合

時和年豐ノ詩

橘在

(63) 明王施<sub>レ</sub>化瑞照然。

月照<sub>レ</sub>階冥<sub>レ</sub>水醴泉。

侍衛官拋<sub>レ</sub>霜戟銳。

人臣節伴<sub>レ</sub>雪松堅。

種<sub>レ</sub>來平露<sub>レ</sub>仙庭側。

重<sub>レ</sub>得威鳳<sub>レ</sub>夷落邊。

鉞砌丹輝離<sub>レ</sub>俗地。

金章紫綬滿<sub>レ</sub>朝賢。

稼猶鄭白源應<sub>レ</sub>沃。

家是陶朱業各傳。

阡廩<sub>レ</sub>稻花<sub>レ</sub>千畝遠。

阜橫<sub>レ</sub>麥穗<sub>レ</sub>兩岐連。

年和時列

典謨好頌堯義德。

八百誰聞太誓篇。

短羽潛鱗無不載。

豊

この中、前二首は一句の首二字を合すると句末の字になるといふやり方である。第三首は時和年豊の字を離合するものである。

## B 形式の日本化。

これは主として離合詩の日本化であり、初は日本における掛詞と合して隠語的ではあつたが、後には純然たる語戯となつたものである。

古今和歌集の卷十、物名にあげられたものは、すべて隠語的な掛詞である。

よみ人しらず

(64) かくばかりあふひの稀になる人を

いかかつらしと思はさるへき。

これらはその底に流れる精神において支那の謎(隠語)と一致してゐるが、輸入とみるべきかはまだ疑問である。

この卷末に、僧正聖寶の作になる歌に、

(66) 『は』をはじめ『る』をはてにてなかめをかけて時の歌よめ」と、人のいひければよめる。

はなのなかめにあくやとて分け行けば心ぞ共に散りぬべらなる。

の如きは離合の日本詩歌に對する變形でもあらうか。又卷の中期には、折句の例として紀貫之の歌がある。

(66) 朱雀院の女郎花あはせの時にをみなへしといふいつもじをかしらにおきてよめる

をぐら山みねたちならしく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき、

又、字訓の和歌もある。古今集卷五秋歌下に、文屋朝康(又は秀康)の歌とて、

(67) ふくからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ。

卷六の冬歌に、紀友則作とて、

(68) 雪ふれば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし。

又、松永貞徳の門人、池田正式の歌には次のやうな離合歌蘭字がある。(田中氏所引)

(69) 草ぶきの門をかまへて西がはのむかひに秋の花ぞかほれる。

大體以上の如く支那の謎の殆んど全部が輸入されて居るのであるが、「折句」と稱するものはまだ例が廣いので、伊勢物語にも、在原業平が東に旅して三河の八幡に至り、

(70) そのさはのほとりのかげにおりて、かれいひくひけり、そのさほにかきつばたいとおもしろくさきたり。それ  
をみてある人のいはく、かきつばたといふいつもじをくのかみにすへてたびの心をよめといはれければよめる。  
からごろもきつくなれにしつましあればはる／＼きぬるたびをしぞおもふ。

又基俊の悦目抄にも「折句の詞といふものあり。……」として、小野小町の歌をあげて、

(71) ことのはもときはなるとたのまなむまろはみよかしへてはちるやと。

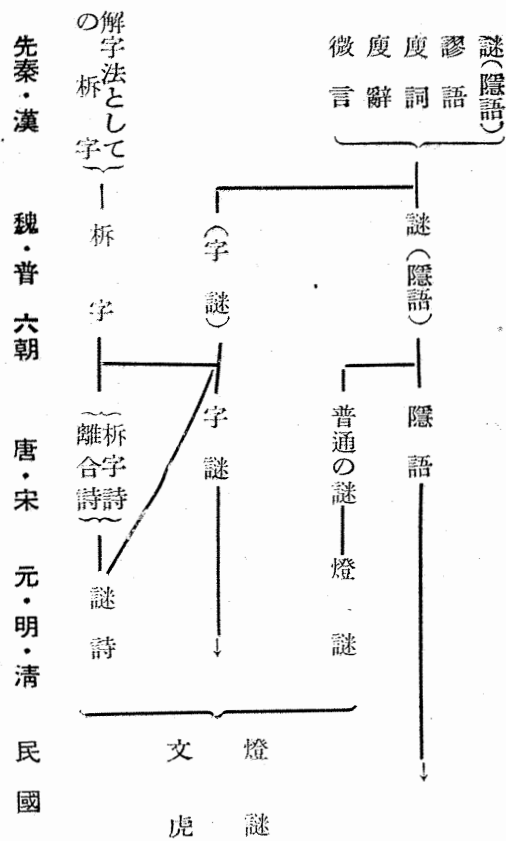
その返りに、

(72) ことのはをとこなつかしきはなると、なべしの人にしらすよなゆめ、

等がある。これらは純粹に日本的なものとも思はれるが、然し、その型式は唐朝よりの輸入であらうと思ふ。

### むすびのことば

以上を綜括すると、支那における「謎」は次の如き發展の經路をたどつたもののやうに思はれる。



「謎」はその本質として、(19)「昏迷せしめる」に在り、内容としては、高尚な隠喩を持つてゐたやうである。隠語については、琅玕代醉編に、演繁露を引いて、「隠者藏匿事情不使暴露也」といつてゐるから、同じやうな本質を持つものといへよう。そして謎となつてもその用途には往々にしてこの方面のものがあつたのであつて、王安石の青苗法をそしる詩(34)は正にそれであると思ふ。

支那の「謎」一般の特徴を云ふと、その名稱の多いことが第一に、次には、時代と共に内容の變化したことが挙げられる。析字は外國にもその例があるので、(田中梅吉氏、「謎の研究」所引)強ひて支那の特徴とは云へないが、かくの如く應用の廣いものは他にはその例がないのでやはり、一特色として挙げられると思ふ。

さて「謎」を言語學的にみるならば、形聲會意等の文字、或はさうでなくても、漢字はその形體上から部分的に多くの要素をもつ。即ち「春」の字は之を「三人日」とも、「一日夫」とも分析出来るのであつて、これは言語學的には許されないことである。即ち、文字には概念の音韻化して、更に文字となつたものと概念から直接文字になるものがある。謎はこの分析によつて生ずるのである。字謎に關するものは析字——即ち一文字の形體的要素を二つ以上に或る意志の下に分析して、その各部分を概念に引き戻してゐるものである。普通の謎は一文字の代りに一語（一文字にかぎらぬ）の分析によるものである。

この分析は前述の如く、言語學的に行はれる時は、解字法として生命を有するが、非言語的に、客意的に行はれるので、「人をして昏迷せしめる」ことになるのである。

或る志意と云つたが、それは分析施行者の思想が關與するのであつて、時代精神の關與は勿論民族精神或は個性の映寫も同時に行はれる。例へば、「春」を「三人日」と分析し<sup>(51)</sup>「一日夫」に分析し、<sup>(28)</sup>「風」を「虫動於凡中」又は「虫入鳳中飛去鳥。」とか、その施行者によつて分析のしかたが異なるのである。

この意味で、私は謎の發生には時代精神、民族精神の關與を痛感するのであり、ひいてかゝる謎の研究は、遂にそれら時代精神の究明にまで至るべきを思ひ、從來、ともすれば、高套的因襲的な嫌ひのないでもなかつた漢學者が一步二歩階段を降りて、これらの謎の研究等にも進む必要がありはしまいかと思ふのである。更に一言するならば、日本におけるものが、日本獨特のもの如くに考へるものもなきにしもあらずと聞く。願はくは更に一層の研究を進め、これが解明に向はんことを。

——一四、一一、五——

附記 本稿は研究發表後日なほ淺く、訂正補入すべき多くのものを捨てざるを得なかつた。後日待つて再考したい。大方の御叱正を期待する次第である。